

論文の内容の要旨

氏名：宮田文久

博士の専攻分野の名称：博士（文化情報分野）

論文題名：現代日本文化における災厄の表象―「越境」と「戦争の記憶」の理論的交点―

本研究は、今日的な災厄の表象を読み解く理論の確立とその具体的実践として、「越境」と「戦争の記憶」というふたつの言説の交点にある現代日本の文芸作品を扱う。今日的な災厄とは、2011年3月11日の発生以降に直面し続けている東日本大震災を取り巻く問題、もう一方は戦後70年を経ながら日々国外の戦争（およびそのイメージ）に対峙するという新旧の戦争をめぐる問題を指示している。これらの問題においては当事者性が不断に更新される状況にあるのだが、そうした2011年「以降」の事態に対して、ジャーナリスティックな観点ではなく、むしろ「以前」における一特に<9・11>が発生した2001年から、2011年の震災の前までに作り出されていた作品において、応用可能な議論を抽出するのが、本研究の構造となる。グローバリゼーションの只中であって、共同体性から個人が逸脱するという形式で表象が形成されつつある「越境」と「戦争の記憶」を参照することによって、分析の主体である「私」が絶えずその当事者性との間で揺らぎを余儀なくされる「コンタクトゾーン」（鈴木智之）という立ち位置を確立し、今日的な災厄の表象に対峙する際に有効な視座を獲得することが可能となる。その立脚点から「越境」と「戦争の記憶」をめぐる理論の総括と、その具体的実践としての文芸作品の解析を共に進める。

第1章『『越境』による共同体性の解除』では、「越境」をめぐる内外の議論を総括していく。1992年にリービ英雄が掲げた「越境」の概念が、クレオール文学を筆頭にしたポストコロニアル文学、または亡命文学といった海外表象の輸入とパラレルな形で成立し、一方ではそうした海外文学／言説受容の草分けたる安部公房の系譜にも連なることを確認する。そのような「越境」の概念を、個人の特殊性にのみ還元するのではなく、また表層的な多文化主義に陥ることもなく、普遍性に対して開示していくという本研究の方向性を明示する。安部公房の「内なる辺境」、ドゥルーズ／ガタリの「マイナー文学」、スピヴァクやダムロッシュ、ディモックらによる「比較文学」における相対化や「世界文学」の更新、ライールの「複数的人間」といった議論を参照しながら、「越境」の概念を共同体の内部において脱共同体化する―「内なる越境」を果たすものとして読み替えていく道筋を示す。

第2章『『戦争の記憶』における共同体性の解除』では、第1章において「越境」に関して概観したように、「戦争の記憶」をめぐる議論の系譜をまとめつつ、その脱共同体の側面を浮かび上がらせていく。中心的に扱われるのはアルヴァックスによる「集合的記憶」という概念である。この概念が国内外でどのように扱われてきたのかを見ることで、「記憶『ブーム』」とされる昨今の状況へ至る議論を総括している。国外においてはノラの「記憶の場」論など、国内においては1995年の阪神・淡路大震災をめぐる「記憶」の語りや、加藤典洋・高橋哲哉の間で行われた「歴史認識論争」などを經由しながら、記憶の「共同体主義」や、「断絶」と「継承」といった問題系を検証する。こうした作業は、アルヴァックスの「集合的記憶」という概念が本来的に持っていた脱共同体のベクトルを再認識する契機となるだろう。こうした過去の「記憶」に対する議論を賦活しつつ、本研究では同時多発的に現在進行形で記憶が更新されていく「新しい戦争」（カルドー）の時代に入ったことを指摘し、旧来の「戦争の記憶」／「新しい戦争の記憶」／新たな「新しい戦争の記憶」が入れ子状に喚起される現代的文芸表象の条件を提示する。このように錯綜した「記憶」の語りにおいては、安寧たる基盤としての共同体性は確保されず、ここにおいて「越境」と「戦争の記憶」の言説の理論的交点が見いだされる。そしてベンヤミンの言語論／歴史認識、シュミットの「政治」論を鑑みながら、共同体性および政治性から距離をとる態度が「越境」と「戦争の記憶」を繋ぐ理路であることを示す。

こうした統合的理論を実践的に活用するため、本論は以降、具体的な文芸作品の読解に入る。第3章『『越境』の普遍性―リービ英雄『千々にくだけて』―』は、主に「越境」論を参照しながら、「戦争の記憶」論との具体的な表象における接点を導く章である。「西洋出身者初の日本語作家」を自称し、先述したように日本における「越境」という概念の提唱者でもあったリービ英雄が<9・11>を描いた作品『千々にくだけて』（2005年）を中心に置き、その「私小説」が個人的な特殊性から普遍性へと開かれていることを確認

する。特異な生い立ちを持ち、しかもその生を私小説へと結実させるリービの作品は、近代日本文学における「私小説」と、ポストコロニアルな文脈における「他者の自伝」（中井亜佐子）の双方の手法を受け継ぐことによって『『開かれた』私小説』（青柳悦子）へと転化されている。〈9・11〉をとりまく西洋の暴力性から離脱しようとする『千々にくだけで』は、そうした脱共同体性において過去の「戦争の記憶」と「新しい戦争の記憶」を自在に行き来する作品であり、また「越境」という概念を単一言語使用者（潜在的な複数言語使用者）たるマジョリティにも接続可能なものにする——「内なる越境」の達成へと歩を進めた作品として評価できる。

第4章「『記憶』の個人性—『ヒロシマ・モナムール』から『H story』へ—」では、「越境」表象を中心に置いた前章の議論を引き継ぎながら、「戦争の記憶」に主に焦点をあて、デュラス／レネによる映画『ヒロシマ・モナムール（*Hiroshima mon amour*）』（1959年、公開時邦題『二十四時間の情事』）と、そのリメイク（の失敗）を描いた諏訪敦彦『H story』（2001年）の比較分析を行う。これら2本の映画は、共に「『戦争の記憶』を語る」ことを語るメタ・フィルムとしての側面を持ち、「戦争の記憶」の表象不可能性を観客に問いかけるものである。『ヒロシマ・モナムール』については、映画製作時まで既に大量に溢れていた原爆の表象／イメージを引用しつつ、しかし「平和」に関する映画ではない作品として完成させていった経緯を確認する。その成立過程を精査する中で、フランスのヌヴェールと日本の広島という二都市のモンタージュを中心としながら、しかしその二都市から逸脱している主人公二人を都市の代理表象とする、という繊細なバランスに依っている『ヒロシマ・モナムール』の構造を明らかにする。これはデュラス／レネを時代的に拘束していた「間共同体」的な表象不可能性のコードを条件とする構造なのだが、一方でこうしたコードさえも共有しない、現実の「希薄さ」（諏訪敦彦）を生きる『H story』においては、主演の女優がデュラスのテキストに対して抱く違和感を契機にして、『ヒロシマ・モナムール』のリメイクが破綻する過程が描かれる。『ヒロシマ・モナムール』および「戦争の記憶」から離れ、現在の広島をただ彷徨する男女を描く本作は、しかしその迂回の果てに原爆ドームに辿り着く（その原爆ドームも、正面から捉えられることはない）。つまり、『H story』は徹底的に「断絶」を描くことで逆説的な「継承」を果たしている。さらに、二都市を代理的に表象するような共同体性も担保されていないという点で、「戦争の記憶」を表象する際に「越境」論が必然的に差し挟まれる現在の条件が映し出されているのである。

第5章「『越境』と『戦争の記憶』の臨界点—岡田利規『三月の5日間』—」では、これまでの議論に「新しい戦争の記憶」という観点も加えながら発展的に総括する表象として、岡田利規による戯曲／小説『三月の5日間』（戯曲：2005年、小説：2007年）を取り上げる。〈9・11〉を経た後、アメリカ軍がイラク空爆を開始した2003年3月21日を挟んだ5日間において、渋谷のラブホテルに滞留する男女を描いた本作では、「現代口語演劇」（平田オリザ）をよりラディカルに「超口語」において受け継いだ岡田が、現代の若者言葉によって日本語の内部において言語を脱臼させ、広義の「翻訳」において渋谷を「外国の街」として描くに至っている。まさにこうした脱共同体的な「内なる越境」において「新しい戦争の記憶」は捉えられるのであるが、『三月の5日間』では慎重に政治性から距離をとることでアクチュアルな非政治性をも獲得しており、「その場での生成変化」（千葉雅也）によって他者と交歓し、共同体の内部においてアクチュアルな個人性を獲得していくメカニズムがここに発見される。

終章では本研究の議論をまとめながら、本論が取り上げてこなかった作家たちによる、2011年「以降」の注目すべき取り組みを挙げ、2011年「以前」を論じてきた本研究の有効性・発展可能性を提示する。本研究の「越境」と「戦争の記憶」の統合的議論とその実践的分析への応用は、私たちが直面している今日的な災厄およびその表象に資するものであると結論する。